

### 三 樂阿彌

三人

シテ 島厚板頭巾、小帶  
ワキ 水衣、半袴  
アヒ 長袴、小刀

通齋一行脚

別保一河藝郡上野の舊名也大別保又は別府と云ふ

▲ワキ次第選齋に出づる門わきに、く、犬の伏せるぞ悲しき。詞これは東國方の者でござる。某未だ太神宮へ参らず候間、此度思ひ立ち、伊勢太神宮へと志し候。旅衣尙萎れゆく往來の、く、ふすまなきぞ悲しき。足に任せて行く程に、く、これぞ名に負ふ伊勢の國、別保に早く著きにけり。詞急ぎ候ほどに、これは早、別保の松原に著いてござる。これなる松を見れば、札を打ち短尺をつけ、尺八の様なるものを、數多かけられて候。如何様いはれの無いことは、ござあるまい。所の人に尋ねばやと存ずる。所の人渡り候か。▲問所の者と御尋ねは、如何様なる御用にて候ぞ。▲ワキ是なる松を見申せば、札を打ち短尺をつけ、尺八の様なる物を、數多かけられて候。いはれない事は候ま

つき込み一握舞  
するごと

雙調切一尺八の  
圓子の名  
大尺八一長き二  
尺五寸  
小尺八一尺二  
寸  
四笛一尺八寸  
半笛一上羽圓子  
と云ふ大尺八に  
對して半分の長

じ 教へて給はり候へ。▲問 されば、其事にて候。あれは古、此所に、樂阿彌と申す尺八吹の、久しく尺八を吹死に致され候により、所の者共痛しう存じ、土中につき込め、印に植ゑたる松にて候。御僧も逆縁ながら、弔うて御通りあれかしと存じ候。やあ、見申せば御僧も、尺八を遊ばすやらん。腰にさよれて候よ。▲ワヤ いやく、これは犬嚇までにて候へども、逆縁ながら弔うて通らうずるにて候。▲問 又御用あらば、重ねて御申し候へ。▲ワヤ 頼みましよ。▲問 心得ました。▲ワヤ 詔扱は、是なるは、樂阿彌陀佛の舊跡かや。いざや跡とひ申さんと、我も持つたる尺八を、懐よりも取出し、この尺八を吹きしむる、く。

▲シテ一セイ 尺八の、あら面白の音いろやな。お主を見れば雙調切なり。▲ワヤ 不思議やな。まどろむ枕の上を見れば、大尺八、小尺八、四笛、半笛、兩笛を差し、われ等の笛を面白がるは、如何なる人にてましますぞ。▲シテ 問 これは古、尺八を吹死にせし、樂阿彌といへる者なるが、御尺八の面白さに、これまで顯れ出でて候。▲ワヤ これは不思議の御事かな。昔語の樂阿彌陀佛に、言葉を交すは不審なり。▲シテ 問 何をか不審し給ふらん。

さの小尺八を用  
ゐること

良安寺一宇治萬  
福寺門前に虚無  
僧の祖良安の盛  
あり

しゆつつうー未  
詳

あの良安寺の尺八の書にも、兩頭を切斷してより此かた、尺八寸の内、古今に通ず、吹き起す無常心の一曲、三千里外に知音は絶すと作られたり。▲ウヤけにく、是は理なり。昔語の樂阿彌陀佛に、言葉を交すも尺八故、古今に通ず心よなう。▲シテ調おう、なかくのこのこと。われもまた、坂東方の人に馴れ申すも尺八故。▲ウヤおう。▲シテ面白や。面白けれど尺八の、地く、わが吹くは喧しよとて、三千里の外知音は隔つまじ。まづわれは差措くなり。御尺八を吹き給へ。▲ウヤ同じくは連れ尺八。▲シテいやく、それは樂阿彌が、御尺八をよこすなりと、地云ふ聲の下よりも、大尺八を取出し、とらあろら、りい、りい、とらあろ、らあろ、ふう。▲シテあら昔戀しや。暇申して歸るなり。▲ウヤあら痛しの御事や、最期を語りおはしませ。▲シテいでくさらば語らん、く。もとより樂阿彌は、しゆつつうなる面ざしにて、彼所の旅人、此所の茶屋、あそこの門にさしよせく、機嫌も知らず、尺八を吹き鳴らして、樂阿彌に代り一錢、尺八吹には何も呉れねば、腹だちやくと、あそこのことにて悪口すれば、尺八吹は圖なしなり、不祥なり、あ

てよやとて、枋あふこだめの三つ伏せに、押し伏せられて。▲シテ繩なはだめ柱はしらだめに。地焙あぶつつ、  
 踏ふんづ、捻ねぢつ、引ひかれつ。その古いにしへの尺八竹しゃくはちたけの、今いまに冥土めいどの苦患くひんとなるを、助け給へ  
 や御僧おんそうよ。尙なほも輪廻りんねの妄執まがしつは、この年までも、數寄すきのさからぬ。姥竹うはたけの戀こひひしさは、わ  
 れながらうつ頬憎ほおにくくやと、かき消ひす様やうにぞ失うせにける。